

こどもみらい館 第三期研究プロジェクト中間報告会の報告

平成26年1月29日実施

中間報告会では、各プロジェクトの報告後、研究プロジェクトスーパーバイザーの鯨岡峻先生、研究アドバイザーの大倉得史先生より、これまでの取り組みに対してのご意見と今後の研究に対して以下のアドバイスをいただき、研究プロジェクトメンバーがこれからの研究の方向性やお互いの研究内容について理解し共有する機会となりました。



子どもの育ちの連続性研究プロジェクト

【子どもの育ちに関するグループ】

★「自信」の姿とは

人との関係のあり方がふわっと広がること、膨らむこと、温かく安心感に満ちたものになること、これが一つの自信の姿ではないだろうか。

根本的な自信とは「何かができるができてまいが、自分は他者から認められる存在だ」とか「何かできて嬉しいときも、できなくて悲しいときも、何もやりたくないときにも、他者は自分の気持ちを分かってくれる」といった無条件の信頼の感覚（基本的信頼感）である。

【保幼小連携グループ】

心を持った一個の主体である子どもが一人の人間として連続的に育っていくという観点を持ち、一人ひとりの子どもの心を見ていく視点で「心の育ちの連続性」について話し合いを深めていくこと。

子ども一人ひとりの心のありようを把握することは、養育・保育・教育に通底する「育てる」という営みの基本でもある。子どもの心がどのように芽生え、膨らみ、発展・分化していくのかを継続的に跡付けしていくことが今後の課題である。

★一人ひとりの子どもの主体としての育ちは、一人の人間として連続しているのだという感覚をもつ

子育て支援研究プロジェクト

人間は、自分の存在が認められた瞬間に「自己肯定感が立ち上がる」ものである。日々の厳しい生活の中で氷付けにされていた自己肯定感が、自分の存在を周りから認められていることがわかった瞬間、「保護者の自己肯定感は立ち上がる」のである。

お母さんの存在を肯定するような、懐深い受け止め方ができるかが一番問われるところである。

子育て支援の場において「悩みを気軽に相談できること」と同時に、「保護者が評価のまなざしにさらされたと感じないような配慮」が重要である。

保護者を一人の人間としてより深く理解するための枠組み作りと、そのために必要な関係性構築のための方法論の蓄積が、保育の場における子育て支援の第一歩ではないかと考えられる。

★今の保護者が抱えている「しんどさ」とは何なのかを考える

今年度の研究プロジェクトでは、アドバイスいただいたことを基に研究計画を立て、研究をすすめております。

*『子どもの育ちの連続性研究プロジェクト』では「子どもの育ちに関するグループ」と「保幼小連携グループ」が共に基本的信頼感から生まれる子どもの「自信」を大切に、「子どもの心の育ち」について継続的に見ること課題とし、エピソード検討や討議をとおして「心の育ちの連続性」について研究をすすめております。

*『子育て支援研究プロジェクト』では、今の保護者の抱える「しんどさ」を理解し、各園所での対応の事例から関係構築の方法を考える。また、エピソード検討をとおして保護者や子どもの存在を肯定的に受け止める支援のあり方について研究をすすめております。

子どもの心に目を向ける保育の在り方

～子ども・子育て会議・これからどうなる？～

講師 鯨岡 峻 中京大学客員教授

これまでは物質面や目に見える子どもの発達面を保障することが「子どもの最善の利益」だと考えられてきましたが、今、行われている制度改革を機に、「子どもの最善の利益」を文字通りに考えて、従来の保育の在り方を根本的に見直すチャンスと捉えるべきではないかと私は考えています。

これまでの発達の考え方は、能力の進歩向上を中心に置くもので、「育てる」ことは「できることを増やすこと」という考え方を助長してきました。そのことが、子どもの心の育ちに目をむけない保育や学校教育を生み出したと考えています。

人の心には、私はこうありたいという「自己充実欲求」と人と気持ちをつなぎたいという「繋合希求欲求」の二つの欲望があります。この二つの欲望があることによって、「主体」は、自分の思いをもって自分らしく生きる一方で、同時に周囲の人と共に生きることが求められます。前者は「私は私」といえる心、後者は「私は私たち」といえる心と言い換えることができます。けれども、主体がもつこれら二つの心はあちらを立てればこちらが立たずの関係にあり、子どもにとってはこのバランスを取るのが難しく、そこに保育者の役割があります。

この両義的な二つの心を育むには、大人の「養護の働き」と「教育の働き」が必要になります。つまり、子どもの思いを受け止め、子どもの存在を認めるという「養護の働き」と大人が子どもに願いを伝えるという「教育の働き」です。しかし、今、保護者も保育者も力がつくことが先決だと考え、「なる」を急ぐあまり、「教育の働き」にウエイトが置かれ、「養護の働き」が弱くなっています。それゆえ、子どもの心が育たない状況にあるのです。今こそ、「力を、力を」と言う前に、子どもの心に目を向ける保育に変えていかなければなりません。

子どもの心に目を向けるためには、「接面」を作れるかどうかが鍵となります。そしてその「接面」に生まれる見えない心を人に伝えるためには、「接面」での出来事をエピソードに描いていくことが重要になります。

この講演会のビデオ・DVDを貸出しています。 [貸出要項へ](#)
講義の詳細は、[要録ページ](#)をご覧ください。

集団が苦手な子どもへの関わり方

講師 弓削マリ子 花ノ木医療福祉センター 日本小児精神神経学科認定医

「集団が苦手な子ども」の背景には様々な要因があります。集団不適應イコール発達障害ではなく、虐待を受けている場合、ADHD(注意欠損多動性障害)と区別がつかないくらい多動で、非常に不注意であるという場合があります。そして、就学前の幼児期後半の約25%の子どもが集団生活が苦手であったり、支援を必要としています。子どもは、その背景にある様々な要因から「困り行動」を起こし、それが原因で怒られたり、失敗することで自己肯定感が下がり、二次障害として引きこもりや反社会的行動、心身症などの様々な問題が出てきています。

「集団の苦手な子ども」の支援の目標は、その子どもや保護者の困っていることに気付き、子どもと保護者を理解して支援していくことです。そして、子どもが達成感を感じ、集団生活を楽しみ、保護者の育児不安を解消し、二次障害を防いで自己肯定感を上げ、子どもが自分らしく社会参加できるようにすることです。そのためには、保育園(所)・幼稚園は全ての子どもにとって「居心地のよい園」であることが大事です。子どもにわかりやすい環境を整え、子どものことをわかったださる先生がいて、子どもが達成感を感じ、自己肯定感を育てていくことが大切になります。その方法としてペアレントトレーニングという手法があります。これは一言でいうと、“ほめて、しつけて、親子の自己肯定感を高められる育児のコツ”です。先生方が集団に対してペアトレ手法を活用される場合にはティーチャートレーニングと呼びます。いずれも、子どもの行動に注目し、子どもの行動を理解して、行動を分析し、子どもの個性・特性にあったほめ方をしていくことが重要になります。子どものいいところを探し、是非、ほめ上手な先生になってください。

この講演会のビデオ・DVDを貸出しています。 [貸出要項へ](#)
講義の詳細は、[要録ページ](#)をご覧ください。

子どもを育む喜びを感じ、
親も育ち学べる取組を
進めます。
(「子どもと共に育む
京都市民憲章」より)



発行日 平成26年8月20日
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る楠町601-1
Tel (075)254-5001 Fax (075)212-9909
URL <http://www.kodomomirai.or.jp>